アジア・アフリカ地域研究 第 20-1 号　2020 年 9 月
Asian and African Area Studies, 20 (1): 139–173, 2020

書　　評

柳沢英輔.『ベトナムの大地にゴングが響く』灯光舎，2019 年，331 p.

梶丸　岳 *

本書は 1 枚の CD をきっかけにベトナムのゴング音楽に惹かれた著者による，13 年にわたるベトナムゴング文化研究の成果である．東南アジアはゴング文化が発展している地域として知られ，とくに島嶼部については非常にさまざまな研究が行なわれてきた．だが本書が対象とするベトナム中部高原のゴング文化は 2008 年にユネスコ世界無形文化遺産に登録されているものの，不安定な政治的情勢のために近年まで外国人は長期調査を行なうことができず，その実態が十分に明らかにされているとはいえない．そうした地域における長期調査に基づいた成果が出たことは，ベトナム地域研究にとっても民族音楽学にとってもおおいに意義がある．

本書の第 1 章では本研究の動機と意義，調査と調査地の概要，および調査対象民族であるバナ族とジャライ族の概要が述べられる．本書の意義として挙げられているのは上述のような背景に加えて，マルチメディア民族誌の可能性を広げるという点である．事実本書には QR コードがついており，リンク先の YouTube リストで動画・音声を視聴することができるようになっている．

第 2 章にはベトナムのゴング文化の歴史，ゴングの種類や価値，竹筒琴ティンニンとゴングの関係などがまとめられている．現地においてゴングは精霊と交信するための道具として重要であるが，その理由として余韻が長く複雑な倍音をもつというゴングの音響特性があることが推論される．さらに現地の人びとがそれぞれのゴングセットの調律と音色に強いこだわりをもっており，調律師がゴング文化を根底から支えている，ということも示される．

第 3 章では，トゥリノ［2015］のいう「参与型パフォーマンス」としての性質が強い伝統的なゴング演奏と，西洋音楽の様式を取り入れ聴衆に見せることを意識した「上演型パフォーマンス」に近い改良ゴングアンサンブルについて解説される．改良ゴングアンサンブルが生まれた背景として，キリスト教への改宗や西洋的な音楽の流入，ゴング演奏の文化遺産化と観光資源化が挙げられている．そして両スタイルを生み出した価値観が地域の中で共存していることが指摘される．

第 4 章ではまずゴングが演奏される状況についての聞き取り調査のまとめが示される．そのうえで主要な演奏機会である葬式および墓放棄祭の内容とゴング演奏の詳細が述べられ，ゴング演奏が儀礼で中心的役割を果たしており，ジャライ族における死生観や霊魂観と深く結びついていることが指摘される．さらに教会の典礼における伴奏としてのゴング演奏についても付け加えられる．

第 5 章では中部高原で使用されるゴングを製造しているベトナム中部の職人が行なっている，鋳造ゴングの製造技法について詳述

* 京都大学大学院人間・環境学研究科

される．そのうえでインドネシアやミャンマーの鍛造ゴングとの比較を通じて製造上の特徴が明らかにされている．

第 6 章では調律師による調律技法に焦点が当てられる．調律師の来歴や活動と調律技法の詳細，さらに若い音楽家が行なう調律方法が解説される．さらに調律前後の音を音響学的に分析し，音高と周波数スペクトルの変化から，調律師が単に音高を調整しているだけではなく，「遠くまでよく響き，よく聴こえる」音響状態を目指していることを明らかにしている．

第 7 章ではバナ族の一村落にあるゴングセットの周波数スペクトル分析によってゴングの音階を明らかにするとともに，ゴングセット内における平ゴングとこぶ付きゴングの音程上の関係性が分析される．そしてゴングセット全体を最終的に五度とオクターブの関係として整理している．

第 8 章では第 7 章の分析を踏まえ，バナ族の葬礼曲と水牛供儀曲における旋律や和音の役割，太鼓のパターンと楽曲形式が分析される．その結果，ゴング音楽にはゴングによる旋律中心のものと太鼓によるリズム中心のものがあること，音階が 2 種類あること，楽曲形式やリズムパターンの実際，和音の役割に主旋律を誘導するものと響きを豊かにするものがあることなどが明らかにされる．

第 9 章はベトナムにおけるゴング文化保護政策と今後のゴング文化の展望についてまとめられている．2000 年代から推進されてきたゴング文化保護政策はゴングを観光資源化する動きと連動しているが，著者によると中部高原地域の少数民族は単に外圧に翻弄されているのではなく，外圧がローカルな文化の再創造と活性化につながる可能性もあるという．

そして「おわりに」では今後の課題として，ゴング調律理論の解明と，バナ族内や他の少数民族との間における調律の多様性の解明，著者がこれまで撮影してきた動画や音声をアーカイブし現地と共有する方法の検討やゴング演奏の魅力を日本に伝える方法の模索が挙げられて論考は締めくくられる．

上述のように本書には映像資料がついている．記述全体をカバーしているわけではないため必ずしもわかりやすくなっているとは言い切れないが，実際のゴングの音を聴き分析の妥当性について検証することができるのは本書の大きな長所である．また，調律や演奏を音響学的・音楽学的に分析している点も本書の価値を高めている．塚田［2014］が批判するように，近年の民族音楽学では社会・文化的分析が主流で音楽そのものの分析がおざなりになりがちである．だがパフォーマンスを対象とする以上，本書のようにその実際を詳細に分析し，民族誌的文脈と有機的に結びつけることが音楽民族誌には本来求められており，本書はその期待に応えている．

とはいえ，本書の分析には不十分な点が多い．問題点としてまず，音響学的・音楽学的分析の不徹底さが挙げられる．本書は「複数の村落を移動しながら，ゴング文化というある一定の地域に共通してみられる文化現象を広域的に調査して，その多様性と共通性，継承における問題点を明らかにしようと」して

いる（p. 13）．だが第 6 章で分析されるのは平ゴング 1 セット分の調律のみ，7 章と 8 章で分析されているのもバナ族の一村落のみである．確かに「おわりに」で今後の課題として多民族・多村落間の比較が挙げられているが，そもそも当初の目的が最終的に本書の中で果たされていないのは問題である．

また第 6 章における周波数スペクトル比較において著者は第二部分音を基音とし，この音と第四部分音に注目して分析している．だがここで第二部分音を基音とする理由は述べられておらず，第 7 章で間接的にその理由が明らかになっている（pp. 233–234）のは論述の順序として問題がある．また第 6 章の最後は若手音楽家のメディア利用について述べられているが，これは別に章を立ててより詳しく論じる必要があるのではないだろうか．本書がベトナム中部高原ゴング文化の今を論じるうえで重要なトピックをここやコラムに付け足しのようなかたちで分散して配置されているのは惜しい．第 8 章の音楽学的分析については，音楽の基本的構造をあぶりだす分析は素晴らしいが，（評者の聴き間違いかもしれないが）打音があるように聴こえるところが休符になっているなど，やや採譜の精密さに欠けているように感じられる．

第二の問題点は民族誌的記述と考察の不十分さである．著者はそもそも民族誌的調査に重きを置いていないが，それにしても記述や考察が薄い．たとえば本書では伝統的なゴングアンサンブルがコミュナルな性質を有している（p. 74）ことが強調されるが，それを補強する具体的な記述が出てこない．肝心な箇所を推測で埋めているのは本書の考察の妥当性に関わる重大な瑕疵である．また著者はゴング文化を支える文化的文脈についてさまざまな民族誌を引きながら考察しているが，対象や地域の違いについてかなり無頓着であるように見受けられる．民族誌はあくまで個別事例なのであり，自身の事例に妥当するとしても地域や対象の違いに対する留保は必要である．さらに第 9 章の文化保護に関する分析も，結論として提出される，受動的なだけではないマイノリティや音楽家という像は，マイノリティ研究でも民族音楽学でも今や目新しいものではない．だがこれに関する先行研究への目配りが本書には欠けている．

著者は民族誌的調査が行ないづらかった理由としてベトナムにおける政治的制約も挙げているが，ベトナムで厚い民族誌を書いている研究者は当然いる．また状況が類似している中国でも数多くの研究者がさまざまな方法を模索しながら長年フィールドワークを実践してきている［西澤・河合 2017］．第 9 章の考察についても中国における研究（長谷［2007］など）が有用な参照点になり得ただろう．ベトナムでの研究蓄積が薄いならば，類似した状況にある他地域の研究も参照することで，本書の探求がより深まった可能性もあるのではないか．

他にも教会での演奏や改良ゴングアンサンブルに関する記述の収まりが悪いなど，全体として十分練り上げられているとは言い難い本書であるが，まずそもそも研究が薄い東南アジア大陸部のゴング文化についてここまで詳細に分析した研究はほぼない点で，東南ア

ジアゴング文化研究に本書が大きな貢献を成し遂げたことは確かである．本書の端々に垣間見えるように現地の人びとと時間をかけて深い関係を築けている著者であれば，今後もう少し綿密な民族誌的調査を行なってゴングの音と文化の関わりについて厚い記述を行なうことができるはずである．さらに分厚くなったゴング文化研究を期待したい．

引　用　文　献

塚田健一．2014.『アフリカ音楽学の挑戦―伝統と変容の音楽民族誌』世界思想社.

トゥリノ，トマス．2015.『ミュージック・アズ・ソーシャルライフ―歌い踊ることをめぐる政治』野澤豊一・西島千尋訳，水声社.

長谷千代子．2007.『文化の政治と生活の詩学―中国雲南省徳宏タイ族の日常的実践』風響社.

西澤治彦・河合洋尚編．2017『フィールドワーク―中国という現場，人類学という実践』風響社.

増原綾子・鈴木絢女・片岡　樹・宮脇聡史・古屋博子.『はじめての東南アジア政治』有斐閣，2018 年，303 p.

日下　渉 *

今日，大学で東南アジア政治について教鞭をとる者は幸運だ．次のように，東南アジア政治に関する入門書・概説書が，2010 年以降，本書も含めて 6 冊も出版されているからである．いずれも質が高く，どれを教科書に採用するか吟味する過程を通じて，教員自身も勉強することができる．もっとも，東南アジア政治の教科書がこれだけあっても，屋上屋を重ねるだけで意味がないのではないか，という懐疑的な見方もあるかもしれない．しかし，いずれも他書にはない特徴と魅力を有している．

①『入門 東南アジア現代政治史』中野亜里・遠藤聡・小高泰・増原綾子・玉置充子，福村出版，2010 年（2016 年に改訂版），2,500 円.

②『東南アジア現代政治入門』清水一史・田村慶子・横山豪志編，ミネルヴァ書房，2011 年（2018 年に改訂版），3,000 円.

③『東南アジアの比較政治学』中村正志編，アジア経済研究所，2012 年，1,900 円.

④『東南アジア地域研究入門 3 政治』山本信人編，慶應義塾大学出版会，2017 年，3,600 円.

⑤『はじめての東南アジア政治』増原綾子・鈴木絢女・片岡樹・宮脇聡史・古屋博子，有斐閣，2018 年，2,200 円.

⑥『教養の東南アジア現代史』川中豪・川村晃一編，ミネルヴァ書房，2020 年，3,200 円.

①は地域の政治史，②は各国の政治史，③政治制度の比較，④と⑥はテーマ別で構成されている．本書⑤の特徴は，各国政治史とテーマ別の解説を絶妙なバランスで組み合わせて，一冊にまとめあげたことである．従来，たとえばテーマ別の本を教科書に採用したら，各国政治史の本を副読本に指定するなどの配慮が必要だった．しかし，本書であれ

* 名古屋大学大学院国際開発研究科